

新米教師1年目の振り返り

札幌市立明園中学校
教諭 小畑 愛

私が昨年度初任者として勤務する上で心掛けていたことは、「真似してみる」ということだった。同僚の先生の実践はもちろん、期限付きとして3年間勤務する中で出会った先生の実践や、研修で学んだ実践など、とにかく自分が良いと思うことは積極的に真似をするよう心掛けた。

他の人の実践を真似してみることで気づいたことを、(1) 教科指導と(2) 学級経営に分けて振り返っていく。なお、昨年度は中学1年生の担任、教科は1学年4クラスの国語科を担当した。

(1) 教科指導

・「書く」ことを中心とした授業作り

これは、先輩教師の実践を真似したものではなく、2回目の教員採用試験の集団討論で一緒のグループになったある受験生の発言をもとに、実践した。授業の中で、自分の意見をノートやプリントに書いて隣の人と交換したり、グループで見せ合ったりする活動を多く取り入れた。はじめのうちは、交流することに抵抗を感じている生徒も多くみられたが、授業の中で書いたものを見せ合うことが徐々に定着していくと、スムーズに作業を行うことができた。ただし、全く自分の意見を書くことができない生徒たちをどうするか、というのが課題として残った。

授業でタイマーを使う

これは、初任者研修の一環として他校参観を行った際、キッチンタイマーで生徒に時間を意識させながら活動を行わせている先生の実践を真似した。これまでは、時計を見ながら何分と指示をするだけだったが、ずるずると前の活動が長引いてしまって、なかなか次の活動に移行することができないことが多々あった。しかし、タイマーを使うようになってから、生徒たちも時間を目で見ても耳で聞いて実感できるので、次の活動にスムーズに移ることができ、授業にメリハリがついた。

・指導案の追試

初任者研修や札幌市教育研究推進事業などで紹介された指導案の追試を行った。また、昨年度は全日本中学校国語教育研究協議会の札幌大会にも参加し、そこで紹介された指導案の追試も行った。研究授業の実践の追試は、普段の授業の中では時数的に難しいこともあり、ほとんど実施できなかった。また、自分の準備不足で行えなかった授業もたくさんあったので、1年間の計画をしっかりと立てることが大切だと改めて実感した。

(2) 学級経営

・学級組織づくり

教科指導は期限付き教諭として経験があったものの、学級担任は初めてであったため、

学級組織や学級のルールなどはすべて学年主任の先生や、副担任の先生の真似をさせていただいた。学年の考え方が「1学年1学級」のつもりで、なんでも担任任せにしないで学年教師団で一つ一つ考えていくというスタイルであったこともあり、学年の先生には随分支えていただいた。前期は右も左も分からないまま学級組織を作っていたが、後期には自分なりに工夫を交え、生徒とも相談しながら学級組織を作ることができた。1年生の新学期は、どんな生徒が入学してくるかもわからない中だけれど、小学校の引き継ぎや、自分が生徒と接してみて感じたことなどをヒントに、学級代表や、委員、係などを決めていくことが大切であるということ学んだ。

・一行日記

毎日生徒に学校から帰ったあとの出来事で一番印象に残ったことと、家庭学習の教科と時間を書かせ、点検した。これは、同僚で同じ初任者の先生の実践を真似た。実は、期限付き時代にも生徒の日記を毎日点検している先生の実践を拝見し、自分でも実践してみたいと考えていたのだが、空き時間でクラス全員分の日記に目を通し、かつコメントも書くということを毎日自分で実践できる自信がなかった。そこで、一行日記というものを紹介され、これなら私にもできるかも知れないと思い、実践した。毎日のコメントのやり取りの中で、生徒の家での様子を知ることができ、生徒への声かけのきっかけにもなるので、今年度も続けて実施している。

・行事への取り組み

担任として一番大変だったのは、学校祭や合唱コンクールでどう生徒達を団結させ、より良いものを作り上げるかということだった。学校祭は本当にどうして良いのか分からず、自分が副担任でつかせていただいた担任の先生が実践していたことを思い出しながら真似をしてみることからはじめた。夏休みにプロジェクトを作り、学級を担当ごとにグループに分け、指示はすべてリーダーたちから下ろさせるつもりだったが、結局自分があれこれと指示をしてしまい、生徒の活躍の場を奪ってしまったように思う。合唱コンクールでも、担任が張り切り過ぎてしまった。生徒主体で行事に取り組ませるためには、担任は何をするのかというのが今年度の課題である。

【まとめ】

昨年度1年間は、初任者として多く研修が設定されており、その中で学ぶことがたくさんあり、日々の実践に活かすことができていた。失敗しながらも、一年間「真似をし続ける」ことで得たことが多くあった。これからは、「真似をする」だけでなく、そこに自分の色をつけていく作業が必要であると思う。2年目以降も自分から学びの場を求め、日々の実践に活かしていきたいと思う。